

ねがいをかなえるりゅう

龍郷町立円小学校 二年 ひめの ちい

「おほしさま。おねがいです。わたしたちの村をたすけてください。」

大きな木の前で一人の女の子が手を合わせています。すると、中からアマミイシカワガエルのガルがふしぎそうなかおをして出てきました。

「どうして、木におねがいをするの。かみさまはじんじやとかにいると思うよ。」

女の子は答えます。

「そうなんです、わたしたちの村にはじんじやがありません。ながれぼしにおねがいをするほうほうもあるのですが、このひと月は雨ばかりふって、なかなかほしが見えないのです。」

「そういえば今年台風がつぎからつぎにやっけてきて、太ようがなかなかかおを出しません。女の子はつづけて話します。」

「それで、さつきからきれいなほしが木の中に見えたので、ながれぼしのかわりにおねがいをしようと思ったのです。」

ガルのせ中にはキラキラかがやく金のほしがいくつも

あるのです。それをほしと思ったのでしょうか。

「ところでどんなおねがいをしていたの。」

ガルは、女の子に聞きました。

「この雨で、村のいねややさいがどんどんかれてきているのです。川の水もあふれそう、みんなしんぱいでもよるもねむれません。この雨をなんとかしてほしいのです。」

女の子のかなしそうなかおを見て、ガルはほおっておけなくなりました。そして、言いました。

「ぼくにまかせておいて。」

ガルは、まず、森で一番もの知りのルリカケスのルリに聞きに行きました。きれいな体できれいな声のルリは、みんなの人気者です。きっといいことを知っています。

「この雨をやますにはどうすればいいかなあ。」

ルリは、やさしい声で言います。

「海の近くになんでもねがいをかなえてくれるりゅうがいると聞いたわ。わたしよりももの知りのキノボリトカゲのキヨロに聞いたらなにか分かるかも。」

二人は、村一番の大きなガジュマルの木にすんでいるキヨロに会いにいきました。きょうりゅうみたいに体が大きく力持ちのキヨロは、大むかしからこのガジュマルの木にすんでいます。だから、村のでんせつもよく知っています。

「ねがいをかなえてくれるりゅうのことを知りませんか。」

ガルとルリは聞きました。キヨロは、少し考えてから言いました。

「この村の入り口に小さなトンネルがある。そこに年にたったの二回、よく晴れた夕方だけにだけりゅうがあらわれるというでんせつがある。」

「会えるかどうかは分からないけど行ってみよう。」

三人はいそいで、海の方へ向かいました。キヨロが海の手すぐそばにある小さな山にいたあなをゆびさして、

「あれがりゅうのすむトンネルだ。でも、今日はあいにくの天気。りゅうがでてこないね。」

その時です。上の空はくもでいっぱいなのに、トンネルのあなのむこうがわだけくもがきえています。そして、まっ赤な太ようがあらわれました。そして、太ようがちようどトンネルの中に入った時です。まっ赤な太ようが目、そのまわりの山が体になって大きなりゅうが三人の前にあらわれました。

「きれいなほしが見えたので、ひさしぶりの晴れだと思っ出てみたが、かんちが良かったな。それにしてもきれいなほしだな。」

りゅうは、ガルの中をじっとみつめながら言いました。三人は、あわてておねがいをします。

「りゅうさん。おねがいです。この雨をなんとかやめさせてください。村の人がこまっているのです。」

りゅうは、

「ふつうの雨ならできるが台風は、わたしだけの力ではむずかしいなあ。きみたちのだいじなものを一つずつもらえればできると思うが。」

と言いました。三人はしばらく考えました。そして、ガルは、

「ぼくは、とおくまでとべる足の力をあげます。」

と言いました。ルリは、

「わたしは、このうつくしい声をあげます。」

と言いました。キヨロは、

「わたしは、この大きな体をあげよう。」

と言いました。りゅうは、

「その力があればなんとかなるかな。」

と言って、そのまま空高くとんでいきました。すると、空のくもがなくなつて、まっ赤なきれいな夕やけがあらわれました。

小さくなつたキヨロ。ギャアギャア声になつたルリ。うごきがおそくなつたガル。そのすがたも気にいったようで、ガルのすんでいた木でなかよくくらししました。そして、村の人たちは、その木をねがいをかなえてくれる木として、いつまでもいつまでも大切にしたのでした。